
足元

天地 とんぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足元

【Nコード】

N3815B

【作者名】

天地 とんぼ

【あらすじ】

ボクはけいちゃんが大好きだ。けいちゃんと一緒に歩くのが好きだし、優しく撫でてくれるのも好きだ。

風が強くて、半端な長さの髪は直ぐに顔にかかってしまう。ボクとけいちゃんは一定の距離を取りながら、隣同士で歩いている。

それは全て無言のやりとりだ。ボクが止まればけいちゃんも止まり、けいちゃんが止まればボクも止まった。

細い路地を二人並んで歩くのは難しい。細くても車は頻繁に通っているのだ。こんな時はボクが前にでる。いつもそうだ。

「ほら、チリ」

そう言って前を則す。ボクは急いで前に出る。けいちゃんは中学校の制服を着ていて

「汚れる」

との理由で、この時間はあまり近付けないのだ。

「触りたい」

とも思うけれどけいちゃんが嫌ならば我慢しようと思う。

そのかわり、家に変えり普段着に着替えてしまえば、けいちゃんはボクを抱き締めたり撫でたりして

「好きだよ」

と言ってくれる。ボクも、無力だが精一杯

「好き」

を伝える。それが幸せだった。

だが最近、けいちゃんは冷たくなった気がする。お母さんの言うことも喧嘩腰で無視するし、お父さんの話なんて聞きやしない。ましてや顔も合わせない。中3のけいちゃんは進路で親や学校の先生と上手くいってないらしい。学校から帰ってくると、けいちゃんはボクに愚痴を聞かせる。クラスの男子がウザイだとか、担任がム力つくだとか、けいちゃんには悩みが多いんだなーと思って心配になる。

そんなときボクはけいちゃんにキスをする。ボクには長い手足が

ないから、昼にお母さんがテレビで見ているような男の人みたいにギョツと抱き締めることも出来ないし、撫でることも出来ない。

だけど、せめてけいちゃんの心を軽くしてあげたくて、スリスリと体を寄せる。それでもけいちゃんの心の闇は取れないみたいで、心配するボクを蹴るようになった。

蹴られると、とても痛くて悲しい。でもそれがけいちゃんのためになるのなら、ボクは耐えられると思った。大好きなけいちゃんのためなら。

ある日、土曜日の朝にけいちゃんに外に連れていってもらった。けいちゃんの二つに結んだ黒い髪が揺れるのを、横目で見ていた。けいちゃんは昨日の夜、ケータイで誰かと喧嘩をしていた。泣いて怒ってた可哀想なけいちゃんは目の下に隈が出来ていて、明らかに寝不足だと判った。なのに

「チリ、行くよ」

と優しく頭を撫でてくれたのだ。けいちゃんは本当に優しい子なのだ。いつも二人で歩く道。まだ早朝なので人は全くいない。けいちゃんは買ったばかりのサンダルを引きずる様に歩いている。これは小さい時からの癖なのだ。

しばらく歩くと、川が見えてくる。この川はボクもけいちゃんも好きだ。よく、辛い事があるとけいちゃんはボクを連れてこの川へ来た。小さい川だが、コンクリートなんかで固めてなく、自然のままの川だ。

けいちゃんは川に沿う土手に尻をついた。ボクも隣に座った。けいちゃんの暖かな手がボクを撫でた。ボクは気持ち良くて、うつとりした。

突然、ボクはめまいと痛みで倒れた。薄れていく意識の中で、脇腹辺りに刺さった果物ナイフと、狂った様に笑う、大好きなけいちゃんが見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3815b/>

足元

2010年10月11日02時34分発行